

納得感とは何か—主体的学びを後押しする心理学的概念を探る

研究期間 平成 29 年度

研究代表者名 橋本優花里

共同研究者名 川越明日香・橋本健夫

1. 目的

納得感とは、教員や仲間等の様々な他者とのやり取りの中で、学習の場や自身の状況を適切に意味づけ、納得していく過程を指し、有用感、充実感、向上感、達成感、向上感、効力感などの多様な心理的感觉を包含する（山地・橋本、2012）¹⁾。しかしながらこの定義は、実践からの経験に基づいて概念的にまとめられたものであり、その測定方法や醸成過程については具体的にされていない。

一方、学びという行動を動機づける心理的な感覚の一つに、講義への満足度がある（島田、2017）²⁾。満足度が高まれば、講義への参加が高まるとされる。本研究で取り挙げる納得感については、満足感との相違について言及されていないため、まずはその違いについて明らかにする必要があるだろう。そこで本研究では、自由記述による調査から学生が納得感や満足感をどのように捉えているのかの言語データを収集し、テキストマイニングを用いて両者の記述に含まれる語の違いを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

- (1) 参加者 公立および私立の大学生 785 名が本調査に参加した。
- (2) 質問紙 以下 4 つの自由記述項目からなる「大学での授業や学びに関する意識調査」と題した調査を行った。質問項目は以下の通りである：①学んだことに満足するのはどのような時でしょうか、②学んだことに納得するのはどのような時でしょうか、③学んだことに対する満足感と納得感は同じでしょうか、違うでしょうか。どちらかを考え、その理由も書いてみましょう、④もっと学びたくなる授業とはどんな授業ですか。
- (3) 手続き 授業時間の 10 分程度を回答時間に充て、直後に回収した。
- (4) 分析 785 件全ての自由記述データを分析対象とした。樋口(2015)を参考に KH Coder(Ver. 2.0)を使用し、頻出語を抽出した。事前処理として複合語の検出を行い、それらを強制抽出するように設定した。その後、同じ文章中に多く出現した語を明らかにするために、質問項目ごとに階層クラスター分析を行った。その際に、最小出現数を 20 に設定し、Ward 法を用いてクラスター化を行った。なお、集計単位は段落とし、最小出現数を 20 に設定した。

3. 結果

以下、①～③の回答の分析について述べる。

(1) 頻出語の分析

①の質問で得られた自由記述について、文章の単純集計を行った結果、783 の段落、1,813 の文が確認された。また、総抽出語数は 12,887、異なり語数は 819 であった。さらに、助詞や助動詞などどのような文章にでもあらわれる一般的な語を除外し、分析に使用される語として 3,532 語、異なり語数 564 が抽出された。これらの頻出語の内の上位 30 語とその出現頻度を表 1 に示す。また、②の質問で得られた自由記述について、文章の単純集計を行った結果、782 の段落、1,702 の文が確認された。また、総抽出語数は 12,352、異なり語数は 929 であった。さらに、助詞や助動詞などどのような文章にでもあらわれる一般的な語が除外され、分析に使用される語として 3,344 語、異なり語数 635 が抽出された。これらの頻出語の内の上位 30 語とその出現頻度を表 2 に示す。表 1 と 2 より、上位 3 つの頻出語が同じである一方で、第 4 位では満足する時には「テスト」という語が、納得する時には「分かる」という語が挙がっていることがわかる。

表1 学んだことに満足する時の頻出語

順位	語	頻度	順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	学ぶ	401	11	内容	50	21	活かす	36
2	自分	221	12	役に立つ	50	22	得る	36
3	理解	125	13	思う	49	23	活用	34
4	テスト	108	14	生活	46	24	実際	33
5	知る	100	15	問題	43	25	生かせる	31
6	知識	80	16	出る	41	26	成績	30
7	結果	77	17	授業	40	27	役立つ	30
8	分かる	61	18	感じる	39	28	点数	29
9	良い	55	19	興味	38	29	生かす	28
10	日常生活	52	20	活	36	30	解ける	26

表2 学んだことに納得する時の頻出語

順位	語	頻度	順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	学ぶ	341	11	疑問	37	21	授業	27
2	自分	252	12	問題	33	22	生活	27
3	理解	245	13	感じる	32	23	答え	26
4	分かる	82	14	結果	30	24	経験	25
5	実際	62	15	考える	30	25	聞く	24
6	知識	61	16	活用	29	26	活かす	23
7	説明	59	17	考え	29	27	今	22
8	内容	43	18	日常生活	29	28	人	22
9	知る	42	19	体験	28	29	教える	20
10	思う	38	20	解決	27	30	得る	20

続いて、頻出語上位 30 語のうち、両質問に含まれた頻出語の出現頻度について χ^2 検定による比較を行った。その結果、「テスト」、「活」、「興味」、「出る」、「成績」、「点数」、「役に立つ」、「役立つ」、「良い」の頻出語を含んだ回答は、②よりも①において多かった(補正後 $ps<.001$)。一方で、「経験」、「考え」、「考える」、「正しい」、「説明」、「体験」、「答え」の頻出語を含んだ回答は、①よりも②において多かった(補正後 $ps<.001$)。なお、「解ける」、「解決」、「疑問」、「今」、「人」、「活かす」、「生かせる」、「得る」、「納得」、「聞く」の頻出語を含んだ回答では差がなかった(補正後 $ps>.05$)。

(2) クラスタ分析

次に、①と②の頻出語について段落集計による階層クラスタ分析を行った結果、各 6 つのクラスタが見出された。クラスタ分析の結果を表 3 に示す。表 3 より、クラスタ 3 や 4 のように両問において類似の語が同じような結びつきで出てきている一方で、クラスタ 1 や 5 ようにそれぞれで異なった語が結びついて出ていることも示された。このことは、満足感と納得感が得られる場面は、重複することもあればそうでないことも示唆するといえる。

表 3 ①と②におけるクラスタ分析の結果

	①「学んだことに満足するとき」	②「学んだことに納得するとき」
クラスタ 1	「問題」「解ける」	「思う」「解決」「疑問」
クラスタ 2	「試験」「結果」「出る」「成績」 「良い」「点数」「テスト」	「活用」「知識」「得る」
クラスタ 3	「日常生活」「活かす」「活」「学ぶ」 「役に立つ」「生活」「役立つ」	「日常生活」「活かす」「体験」 「実際」「生活」「経験」
クラスタ 4	「活用」「実際」「場面」「生かせる」 「興味」「授業」「内容」「理解」	「理解」「自分」「学ぶ」「内容」 「授業」「説明」「聞く」
クラスタ 5	「新しい」「知識」「得る」 「活かす」「感じる」「身」「疑問」	「教える」「人」 「納得」「感じる」「今」「知る」
クラスタ 6	「思う」「人」「学べる」「自分」 「知る」「満足」「分かる」	「考え」「答え」「考える」「結果」 「問題」「分かる」

(3) 満足感と納得感の同異について

③の回答については、満足感と納得感が「同じ(似ているなど)」と明記している回答が 189 件、「違う(同じではない, 異なるなど)」と明記した回答が 550 件、「どちらともいえない」あるいは明記されていない回答が 42 件、未回答が 4 件であった。

た。「同じ」としている回答数と「違う」としている回答数について χ^2 検定を行ったところ、「違う」という回答が「同じ」と考える回答よりも多いことが示された($\chi^2=176.35$, $df=1$, $p<.001$)。

4. 結果

本研究は、自由記述による調査から学生が満足感や納得感をどのように捉えているのかの言語データを収集し、テキストマイニングを用いて両者に含まれる語の違いを検討した。

まず、③の分析より、学生は、満足感と納得感を異なる感覚としてとらえていることが明らかになった。そして、①と②の頻出語の比較から、いずれも、学んだことを理解した時に生じる感覚であることが示された。その一方で、①では「テスト」、「活」、「興味」、「出る」、「成績」、「点数」、「役に立つ」、「役立つ」、「良い」の語が、②では、「経験」、「考え」、「考える」、「正しい」、「説明」、「体験」、「答え」の頻出語を含んだ回答が多くみられた。このことから、満足感とはテストなどによる自身の学んだことのアウトプットが有効だった時に生じ、納得感とは学んだことを自身の中に

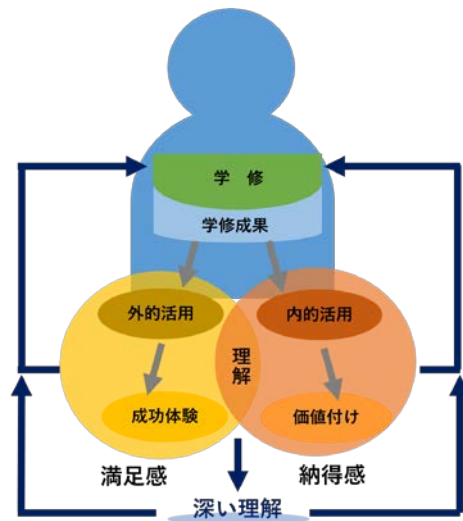


図1 学修と納得感、満足感の関係

インプットし、考える際に生じる感覚であることが示された。また、段落集計における階層クラスター分析の結果からそれぞれの語の結びつきの違いが明らかになり、満足感と納得感が得られる場面では、類似しているものもあればそうでないものもあることが示された。以上のことから、学修と納得感および満足感の関係は、図1のようになると考えらえる。

しかしながら本研究では、当初納得感の構成要素として考えられた有用感や効力感などの心理的感覚との関連性については明らかにしていない。これまで満足感に影響を与える種々の要因が検討されてきているが、納得感についても同様の検討を進めていく必要があるだろう。

5. 引用文献

- (1) 山地弘起・橋本健夫(2012) 学生の納得感を高める大学授業. ナカニシヤ出版, 東京
- (2) 島田英昭 (2017) 大学授業の満足度を規定する要因—期待一致・代替魅力・自己適合の効果の比較. 信州大学教育学部研究論集, 11, 175-180.